

対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける 心理的ストレス過程

清水健司（信州大学 人文学部 人間情報学科）

岡村寿代（兵庫教育大学大学院 健康・臨床教育学系）

川邊浩史（西九州大学短期大学部 幼児保育学科）

The psychological stress process in terms of two dimension model of social phobic tendency and narcissistic personality

Kenji SHIMIZU (Shinshu University)

Hisayo OKAMURA (Hyogo University of Teacher Education)

Hirofumi KAWABE (Nishikyushu University Junior College)

Key words : 対人恐怖心性, 自己愛傾向, 心理的ストレスモデル

【目的】

自己愛と対人恐怖は青年期において取り上げられることが多く、健常水準から病理水準までを網羅する広範な構成概念である。特に実証研究においては、一般青年が持つ特性としての「自信や優越感などの自己に対する肯定的感覚」を指す自己愛傾向（小塩，2004）と、「人見知りや過度の気遣いなどの強い対人緊張」を指す対人恐怖心性（永井，1994）が広く知られるところである。この自己愛傾向と対人恐怖心性は、共に青年期において高まりを示しやすい性質を持つことから、今日では両指標各々を個別的な主題とする報告が充実を見せしており、一般青年における普遍的な心性としての観点から多角的な検討がなされている。その中で、清水・川邊・海塚（2007）は自己愛傾向と対人恐怖心性を個別に扱うのではなく、両指標を同時に取り扱った実証モデルを提唱している。

清水他（2007）は、臨床的観点より岡野（1998）が述べた“恥に対する敏感さ”と“自己顕示欲の強さ”を直交2軸として捉えた概念モデルの実証可能性を検証した。岡野（1998）モデルとは、Gabbard（1994 館監訳 1997）が示唆する、自己愛性パーソナリティ障害における誇大的で他者評価に鈍感な無関心型自己愛（oblivious type）と、誇大的でありながらも恥の感覚が強く他者評価に敏感な過敏型自己愛（hypervigilant type）に見られる2種類の自己愛サブタイプに加えて、自己否定感の強さを主特徴とする対人不安タイプを整理する枠組みである。清水他（2007）は、岡野（1998）モデルを再度整理した上で、実証的観点よ

り対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデル（以下、2次元モデル）を提示した（Figure 1）。これは、対人恐怖心性を横軸、自己愛傾向を縦軸とする直交2軸にて、両指標の得点の高低から一般青年を5分類する類型論モデルである。これは、対人恐怖において2つのサブタイプとされる“羞恥感情を苦悩の中心主題とする、小心で緊張し易く、消極的・弱力的な単純型対人恐怖（鍋田，2007）と、“背後に傷つき易い自己愛を持ち、対人緊張に対する強迫的な防衛を特徴とする平均的対人恐怖”（鍋田，2007）に加え、自己愛性パーソナリティ障害における2つのサブタイプである無関心型自己愛と過敏型自己愛の関連を包括的に布置する枠組みを有している。この2次元モデルは、青年期に特徴的とされる両指標の組み合わせから5類型を見出し、各類型において適応性に関連した要因検討を行うことで、一般青年の精神的健康維持への対策、および該当する臨床的なサブタイプへの治療的示唆を得ることを目的とするものである。

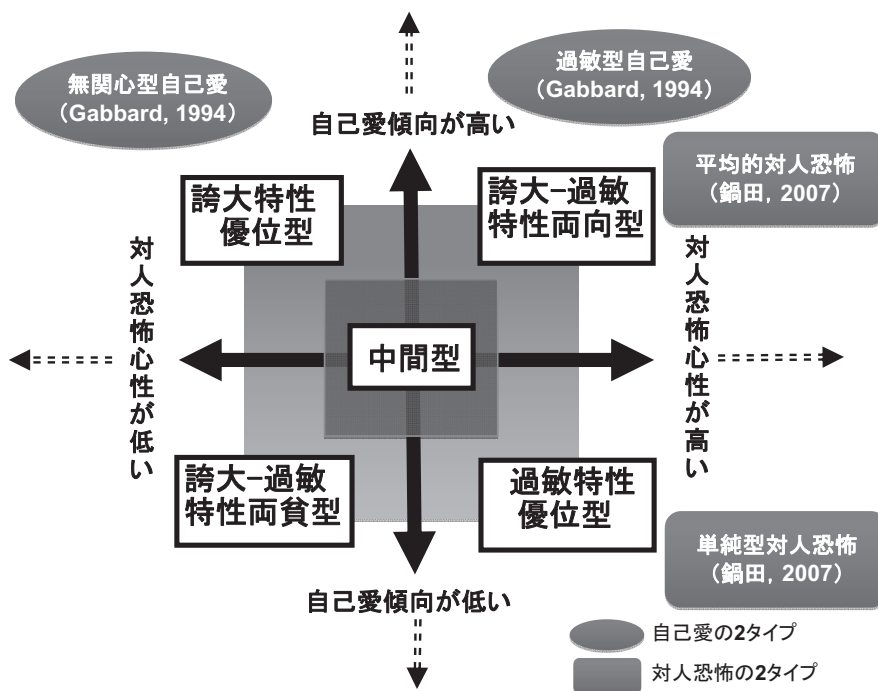


Figure 1. 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルと自己愛・対人恐怖のサブタイプとの関連

既に清水・川邊・海塚（2008）では、2次元モデルの類型である誇大-過敏特性両向型・過敏特性優位型において精神的健康の低さが示唆されており、対照的に誇大-過敏特性両貧型・誇大特性優位型では精神的健康の高さが示唆されている。この現象には、各類型における日常生活のネガティブ事象への耐性や対処行動の機能的差異が深く関係していることが予測される。しかし、これまで2次元モデルの5類型においてストレス事象への対応性に言及した報告が見られないため、精神的健康維持を可能とする関連要因や、精神的健康を低減させる関連要因は未だに不明確である。そのため、本研究では、既に広く知られる Lazarus & Folkman（1984 本明・春木・織田監訳 1991）の心理的ストレスモデルを用いること

で、先述の課題に対応することとする。心理的ストレスモデルとは、個人が経験する負荷的なイベントに対して、どのような認知的・行動的対処を選択するのかによって、結果的な情動反応が様々な影響を受けることについて言及するもので「①先行条件→②認知的評価→③対処方略（コーピング）→④精神的健康」という一連の過程が想定されている（加藤，2001）。これは、決して避けることのできないストレスフルな事象（①ストレッサー）に対して、「体験した外的出来事への有害性に関する認識」や「対処可能性に対する認識」の判断（②認知的評価）が行われる。そして、①・②の過程を経た後も個人に対して負荷の意味をもたらす場合には、それを低減させるために実際どのような思考的対処や行動的対処が選択（③対処方略）されるのかによって、結果的な心理的ストレス反応（④精神的健康）の程度が異なってくるという図式を持つ。この図式から考えると清水他（2008）にて示された各類型の精神的健康に関する知見は Lazarus & Folkman（1984 本明・春木・織田監訳 1991）の心理的ストレスモデルにおける一連の最終的結果のみを示したものに過ぎないことになる。2次元モデルの研究意義は、一般青年への精神的健康維持と該当する臨床的なサブタイプへの治療的示唆に言及することにあるのならば、本来必要なのは結果的な精神的健康の差異ではなく、むしろそのような結果に至るまでの一連の過程を明確にすることである。

従って、本研究では、Lazarus & Folkman（1984 本明・春木・織田監訳 1991）の心理的ストレスモデルを採用することにより、2次元モデルの5類型における精神的健康の差異を示すに至るまでの過程を検討することで、該当する臨床サブタイプへの治療的示唆の一助とすることを目的とする。

【方法】

調査協力者

H県内の大学生578名（男性：286名，女性：292名）を対象とし、平均年齢は20.1歳（ $SD=2.12$ 歳）であった。質問紙調査は、大学の授業時間を利用して無記名・集団で実施された。

測定尺度の構成

1. **対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデル尺度（TSNS-S）**：清水他（2008）によるものを用い、20項目（対人恐怖心性を測定する10項目（ex. 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない）、自己愛傾向を測定する10項目（ex. 私は、周りの人たちより有能な人間であると思う））について“全然当てはまらない”～“非常に当てはまる”の7段階で評定を求めた。

2. **大学生用日常生活ストレッサー尺度**：嶋（1999）によるものを使用し、23項目について「最近2ヶ月ほどの間に経験した日常生活における苛立ちごと（ex. 他人から失望させられたこと、レポートやゼミの準備が大変なこと）」について“経験しない・感じない”～“とても気になった”の5段階で評定を求めた。

3. **ストレス認知尺度**：田邊・堂野（1999）によるストレス認知尺度から脅威（ex. 自分に強い影響を与えそうな出来事である）・伴負担対処可能（ex. 自分の対処や努力しだいである）とかなりそうな出来事である）の8項目を用い、測定尺度の2. である大学生用日常生活ス

トレッサーに関して「それらの経験した苛立ちごとをどのように認識していたか」との教示を示したうえで“全くちがう”～“その通りだ”の4段階で評定を求めた。

4. **ストレス対処方略尺度 (TAC-24)**：神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野 (1995) によるものを用い、24項目について「その場を乗り越え、落ち着くために普段からどのように考え、行動していますか」との教示を示したうえで“決してしない”～“いつも行う”の5段階で評定を求めた。(ex. 悪いことばかりではないと楽観的に考える、自分では手に負えないと考え放棄する)

5. **心理的ストレス反応尺度 (SRS-18)**：鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野 (1998) によるものを用い、18項目 (ex. 気持ちが沈んでいる、怒りっぽくなる) について“全くちがう”～“その通りだ”の4段階で評定を求めた。

【結果】

各測定尺度の検討

TSNS-S に対して因子分析 (主因子法-Promax 回転) を行った結果、「対人恐怖心性領域」と「自己愛傾向領域」の2因子を最適解とした。因子間相関は清水他 (2008) と同様に小さな負の相関 ($r=-.18$) を示し、 α 係数は各々 .83, .80であった。次にストレス認知尺度に対して因子分析 (主因子法-Promax 回転) を行った結果、ストレッサーに対する認知的評価として「脅威」(ex. 自分の心や立場を脅かしそうな出来事である) と「対処可能性」(ex. 自分の対処や努力しだいでなんとかなりそうな出来事である) の2因子を最適解とし、 α 係数は .81, .69であった。そして、ストレス対処方略尺度に対して因子分析 (主因子法-Promax 回転) を行った結果、「問題回避」(ex. 自分では手に負えないと考え放棄する)、「気晴らし」(ex. 誰かに話を聞いてもらい、気を静めようとする)、「肯定的解釈」(ex. 悪い面ばかりでなく良い面を見つけてゆく)、「問題解決」(ex. どのような対策を取るべきか綿密に考える) の4因子を最適解とした。 α 係数は順に .83, .76, .75, .77であった。また、大学生用日常生活ストレッサー尺度と SRS-18は全項目の合計得点を算出し、前者はストレッサーとして扱い、後者は心理的ストレス反応として扱った。 α 係数は .88, .92であった。このように、各指標において一定の内的整合性が確認されたため、以下の分析では全指標を用いた。

5 類型における心理的ストレス過程に関する検討

TSNS-S を用いて清水他 (2008) の分類基準に従い、2次元モデルにおける5類型を分類した。そして、類型を要因としてストレッサー、ストレス認知 (脅威、対処可能性)、心理的ストレス反応、ストレス対処方略 (問題回避、気晴らし、肯定的解釈、問題解決) の8変数を従属変数とした多変量分散分析を行った。その結果、群間の差を示す Wilks のラムダは有意であったため ($\Lambda = .66$ $p < .05$)、8つの従属変数にて個別の分散分析を行った。なお、主効果の検定には第1種の過誤の可能性を5%水準に維持するため有意水準を $p < .0063$ ($.05/8$) に切り下げた。その結果、対処可能性と気晴らしでは有意な主効果は見られなかったが、ストレッサー、脅威、心理的ストレス反応、問題回避、肯定的解釈、問題解決に

において有意な主効果が見られた。また、多重比較 (Tukey 法) を行った結果を Table 1 に示した。そして、各類型における心理的ストレス過程を視覚的に捉えやすくするため、8つの従属変数を標準化得点に変換した後に平均値を求めたものを Figure 2 に示した。

Table 1 各類型におけるストレスラー, 認知的評価, 心理的ストレス反応, 対処方略の平均値と標準偏差

	過敏特性優位型		誇大特性優位型		中間型		誇大-過敏特性両向型		誇大-過敏特性両貧型		F 値	多重比較 (Tukey 法)
	N=138	23.9%	N=136	23.5%	N=95	16.4%	N=98	17.0%	N=111	19.2%		
ストレスラー	44.0	(13.82)	30.7	(13.53)	34.4	(13.96)	45.9	(14.08)	31.1	(12.79)	32.84 *	誇優：両貧：中間 < 過優：両向
脅威	11.5	(3.55)	10.4	(3.64)	10.7	(2.86)	12.8	(3.68)	9.9	(3.35)	11.53 *	両貧：誇優：中間：過優 < 両向、両貧 < 過優
対処可能性	7.7	(1.83)	8.3	(2.08)	7.8	(1.83)	7.7	(2.06)	7.9	(2.29)	2.11	n.s.
心理的ストレス反応	25.7	(10.88)	14.4	(10.64)	19.0	(9.61)	26.7	(10.92)	14.0	(9.52)	40.25 *	誇優：両貧 < 中間 < 過優：両向
問題回避	16.9	(5.12)	13.7	(4.45)	15.3	(4.47)	18.1	(5.54)	14.7	(4.65)	14.94 *	誇優：両貧 < 過優：両向、中間 < 両向
気晴らし	19.2	(4.55)	19.0	(4.59)	20.1	(4.61)	20.1	(4.32)	18.4	(4.55)	2.65	n.s.
肯定的解釈	16.7	(4.37)	19.3	(4.62)	17.7	(4.27)	18.4	(4.34)	18.4	(4.08)	6.82 *	過優 < 両貧：両向：誇優、中間 < 誇優
問題解決	14.9	(3.79)	16.2	(4.19)	14.4	(3.57)	15.7	(3.62)	14.8	(4.09)	4.07 *	中間 < 誇優、両貧 < 誇優

* $p < .0063$

注) 両向：誇大-過敏特性両向型, 両貧：誇大-過敏特性両貧型
過優：過敏特性優位型, 誇優：誇大特性優位型, 中間：中間型

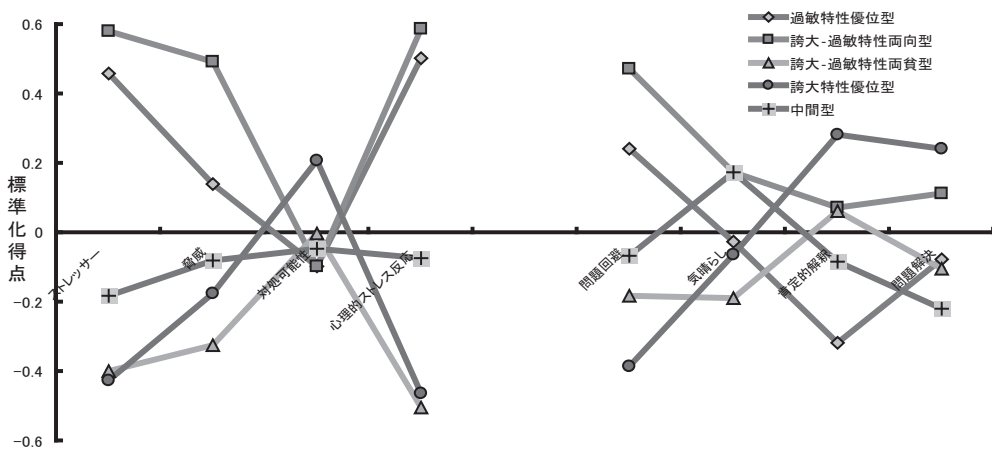


Figure 2. 各類型におけるストレスラー, 認知的評価, 心理的ストレス反応, 対処方略の平均値

まず、ストレッサー得点では、誇大-過敏特性両向型と過敏特性優位型が他類型よりも高く、ストレス認知における脅威得点では、誇大-過敏特性両向型が他類型に比較して最も高く、過敏特性優位型が誇大-過敏特性両向型よりも高かった。そして、心理的ストレス反応得点では、誇大-過敏特性両向型と過敏特性優位型が高く、中間型は平均水準にあり、誇大特性優位型と誇大-過敏特性両向型は低かった。また、ストレス対処方略における問題回避得点では、誇大-過敏特性両向型と過敏特性優位型が誇大特性優位型と誇大-過敏特性両向型よりも高く、誇大-過敏特性両向型が中間型よりも高かった。さらに、肯定的解釈得点では、過敏特性優位型が誇大特性優位型と誇大-過敏特性両向型と誇大-過敏特性両向型よりも低く、誇大特性優位型は中間型よりも高かった。最後に問題解決得点では、誇大特性優位型が中間型と誇大-過敏特性両向型よりも高かった。

そして、各類型において心理的ストレス反応得点に影響可能性を持つ変数を検討するため、階層的重回帰分析を行った。本研究は、心理的ストレスモデルにおける「①先行条件→②認知的評価→③対処方略（コーピング）→④精神的健康」との一連の流れを想定しているため、④を従属変数とし、①～③を独立変数として各 Step に分けて分析を行った。従って、各類型で心理的ストレス反応得点を従属変数として、Step1にストレッサー得点を投入、Step2にストレス認知の脅威得点と対処可能性得点を投入、Step3にストレス対処方略の4下位尺度得点を独立変数として投入した。階層的重回帰分析の結果を Table 2 に示した（係数は全て標準偏回帰係数）。全類型において、心理的ストレス反応にストレッサーが正の係数を示し、ストレス認知では誇大-過敏特性両向型と過敏特性優位型が脅威において正の係数を示した。また、ストレス対処方略では過敏特性優位型が肯定的解釈において負の係数を示し、誇大特性優位型が問題回避において正の係数、肯定的解釈において負の係数を示した。

Table 2 各類型における心理的ストレス反応を従属変数とした階層的重回帰分析の結果

		過敏特性優 位型	誇大-過敏 特性両向型	誇大-過敏 特性両向型	誇大特性優 位型	中間型	
Step1	ストレッサー	.531*	.454*	.521*	.444*	.427*	
	R^2	.511*	.407*	.347*	.323*	.267*	
Step2	認知的評価	脅威	.176*	.284*	.106	.085	.048
		対処可能性	.035	.060	-.037	-.032	.049
	R^2	.548	.472	.363	.346	.277	
	ΔR^2	.037*	.065*	.016	.023	.010	
Step3	対処方略	問題回避	.031	.138	-.005	.206*	.155
		気晴らし	.073	-.072	.184	.110	.083
		肯定的解釈	-.314*	-.135	-.066	-.238*	-.139
		問題解決	.103	-.019	-.037	.035	-.170
		R^2	.636	.497	.374	.421	.324
		ΔR^2	.088*	.025	.012	.075*	.046

* $p < .05$

【考察】

過敏特性優位型

日常的なストレスラーに対する認識の強さと、認知的評価における脅威の強さからストレス耐性への弱さが示唆される。また、心理的ストレス反応の高さから精神的健康の低い状態像が伺え、ストレス対処方略では問題回避の強さと肯定的解釈の弱さを特徴としている。そして、ストレス刺激を有害であると認識する強さと、対処方略としての肯定的解釈の弱さが心理的ストレス反応の増加に影響する可能性が推測される。

過敏特性優位型は、鍋田（1997）の述べる、対人場面での強い緊張や羞恥感情への苦悩を主題とする社会恐怖（DSM-IV-TR, APA 2000）に近似する類型であると想定されている。この社会恐怖について鍋田（2007）は、対人関係での振舞い方が分からず漠然とした対人圧迫感のために回避を特徴とした弱力的防衛スタイルを示し、対人関係形成能力やコミュニケーション能力が稚拙であることを指摘している。また、西岡（1999）は、社会恐怖における回避性人格障害の合併率の高さに触れ、批判や拒絶に強い恐れを持つため、他者への接近願望と回避衝動に対する葛藤自体が乏しいことを述べている。そして、過敏特性優位型における実証的知見では、私的自意識の弱さに比較して強い公的自意識を持つため他者視線に敏感（清水他、2007）になりやすく、心身の危機に敏感で否定的感情を持ちやすい性格特性（清水他、2008）を持つことが示唆されている。

従って、本類型は自己に対して強い否定的評価を持つために、日常生活における出来事の多くが脅威的な事象としてネガティブに捉えられてしまうことが考えられる。また、その対処方法として直面する様々な問題が単純に放棄されてしまうことに加え、現状に対して更なる否定的解釈を重ねることによって精神的健康を損ない続ける可能性が推測される。

誇大-過敏特性両向型

日常的なストレスラーの認識が強く、認知的評価における脅威の強さ、心理的ストレス反応の強さに見られるように、ストレス耐性への弱さと精神的健康の低い状態像が示唆される。また、対処方略では肯定的解釈は平均水準にあるものの、問題回避の強さと相対的な問題解決の強さを特徴としている。そして、ストレス刺激を有害であると認識する強さが心理的ストレス反応の増加に影響する可能性が推測される。

誇大-過敏特性両向型は、Gabbard（1994 館監訳 1997）の過敏型自己愛と、鍋田（2007）と西岡（1999）の完全主義・負けず嫌いで強迫心性を持つ平均的対人恐怖に近似する類型であると想定されている。このタイプについて西岡（1999）では、他者評価に敏感で自己の弱点を見透かされるのではないかと不安が強く、強力的要素と弱力的要素が併存するために内的葛藤が自覚されやすい特徴を持つことが指摘されている。また、過敏型自己愛について上地・宮下（2004）は、恥の感覚への敏感さや対人関係に強い回避傾向を示す反面、肯定的評価を強く望んでおり、その上、自己を否定される言動に対して極端に脆弱であるため、そのような場面を察知した場合には、恥や傷つきに対する防衛手段として素早く人間関係から退却することを指摘している。

また誇大-過敏特性両向型は、基本的信頼感の弱さ（清水他，2007）を問題に持つため、常に他者評価に疑念・恐怖を抱くことになり、結果的にストレス刺激への過敏性・耐性の弱さを呈することになるとも考えられる。そして、強力性と弱力性の併存に見られる強い葛藤様式のため、対処方略としても問題回避と問題解決の両価的選択にて板挟みになり、実際のストレス対処が低減要因として機能していないことが示唆される。

従って、本類型はストレス刺激に対して常に敏感であり続けなければならない中で、一方では問題の放棄を望みながら、他方では積極的な関与にも自己の注意が配分されてしまう。そのため、結果的に機能的とはいえない姿を呈し、精神的健康を損ない続ける可能性が推測される。

誇大-過敏特性両貧型

日常的なストレスラーの認識、認知的評価における脅威、心理的ストレス反応はいずれも弱い。また、対処方略では問題回避の低さを特徴としていることから、一定のストレス耐性を保持していることが示唆される。

誇大-過敏特性両貧型は、自己愛傾向と対人恐怖心性が共に低い類型であり、岡野（1998）や清水他（2007）においても対応する臨床サブタイプは想定されていない。清水他（2007）では、公的自意識・私的自意識の両面の低さから自己特有の世界観を持ち、自己の情緒状態に注目することが少ないため内的葛藤状況に遭遇する機会そのものの少なさが指摘されている。また、清水他（2008）では物事に対して現実的に対応し、呑気とも表現される性格特性を持つことから高い精神的健康を保っている姿が示唆されている。

従って、本類型はストレス耐性の強さ、困難状況に対して逃避的な対応に固執しない結果として、安定した精神的健康を維持していることが推測される。

誇大特性優位型

日常的なストレスラーに対する認識は低く、認知的評価における脅威の低さからストレス耐性への強さが示唆される。また、心理的ストレス反応が低いことから一定の精神的健康を保持しており、対処方略では問題回避の低さ、肯定的解釈の高さ、問題解決の高さを特徴としている。そして、ネガティブな事象に対して放棄・延期を行わないこと、ネガティブな事象をポジティブ方向に再解釈できることが心理的ストレス反応の低減に作用している可能性が推測される。

誇大特性優位型は、Gabbard（1994 館監訳 1997）の誇大的で強い自己顕示欲を有する無関心型自己愛に近似すると想定される類型である。しかし、無関心型自己愛はあくまでパーソナリティ障害圏に関する記述であり、本研究の調査協力者が一般大学生であることを踏まえると、誇大特性優位型が直接的に無関心型自己愛を表現するものとは考えにくい。また、適応性の高さ・自他に対する強い信頼感を持つ類型（清水他，2007）であり、ストレスラーに対して混乱することなく、対処方略にて一貫した積極的姿勢が用いられることを考えると、本類型は強い活動性を持ちながら、ストレス刺激に柔軟な対応が選択できる能力を有するものと考えられる。

ただし、無関心型自己愛に関して上地・宮下（2004）は、誇大的空想から強い達成動機を

持ち、高いパフォーマンスをもたらすために周囲からの尊敬を得るなどの適応様式を示す反面、仮に一定の他者配慮に欠けた場合には高いパフォーマンスが得られても、専制的・独善的に映る危険性があることを指摘している。これは公的自意識の低さに見られる自己検閲力の弱さも相まって、誇大特性優位型が自己中心性に陥る可能性を持つ（清水他, 2007）知見と関連する。

従って、本類型は頑健なストレス耐性を持ち、積極的なストレス対処が功を奏する精動的な状態像を示すが、自己-他者関係を含めた適応に資するためには情緒的絆の維持が重要な鍵（清水他, 2008）となることが考えられる。

中間型

日常的なストレスに対する認識は低く、認知的評価の脅威と心理的ストレス反応および対処方略は相対的に平均水準を示す。従って、一定のストレス耐性を持ち、バランスの取れたストレス対処方略が取れているものと考えられる。

本類型は、清水他（2007）では理想自己と現実自己のズレが少ないため葛藤状況に陥りにくいことが指摘されており、自意識・適応指標や性格特性・精神的健康（清水他, 2008）の各指標においても概ね平均水準にあることが示されている。これは本研究の結果も同様であり、多くの指標が平均水準にあることから考えると、中間型では葛藤状況の少ない安定した調和的ストレス対処が行われていることが推測される。

【引用文献】

- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Forth Edition Text Revised: DSM-IV-TR*. Washington, DC: Author.
- （高橋三郎・大野裕・染矢俊幸（訳）（2002）. DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院）
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington: American Psychiatric Press.
- （ギャバード, G.O. 館 哲朗（監訳）（1997）. 精神力動的精神医学 その臨床実践 DSM-IV版 臨床篇；Ⅱ軸障害 岩崎学術出版社）
- Lazarus, R.S. & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. Springer Publishing Company. New York.
- （ラザルス, R. S. & フォルクマン, S. 本明寛・春木豊・織田正美（監訳）（1991）. ストレスの心理学 —認知的評価と対処の研究— 実務教育出版）
- 上地雄一郎・宮下一博（2004）. もろい青少年の心 —自己愛の障害— 北大路書房
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二（1995）. 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度（TAC-24）の作成 教育相談研究, **33**, 41-47.
- 加藤司（2001）. 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49**, 295-304.
- 鍋田恭孝（1997）. 対人恐怖・醜形恐怖 —“他者を恐れ・自らを嫌悪する病”の心理と病理— 金剛出版
- 鍋田恭孝（2007）. 対人恐怖症の今日の問題 鍋田恭孝（編）思春期臨床の考え方・すすめ方 金

剛出版 pp.130-148.

永井徹 (1994). 対人恐怖の心理 サイエンス社

西岡和郎 (1999). 対人恐怖症とパーソナリティ 精神科治療学, **14**, 753-759.

岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析 一人対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版社

小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版

嶋信宏 (1999). 大学生用日常生活ストレス尺度の検討 中京大学社会学部紀要, **14**, 69-83.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, **78**, 9-16.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, **16**, 350-362.

鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (1998). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, **4**, 22-29.

田邊敏明・堂野佐俊 (1999). 大学生におけるネガティブストレスタイプと対処行動の関連 教育心理学研究, **47**, 239-247.

(2009年11月9日受理, 11月24日掲載承認)